

キャトリン ホミック ムラ ビト エストニア出身の元キリスト教徒

:

明:ソ による暗 の共 党 代、ある3 の幼女が、神を つけ出すための探求を始めます。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: キャトリン ホミック

ED4 Aug 2014

集日 04 Aug 2014



私の最初の は3 のときのもので、私は父にこう ねたのを えています。「私は死んだらどうなるの？」彼は小さな私からそのような がされたことにとても き、それに答えることは残念ながら出来ませんでした。ここエストニアでは、ソ の支配下において信仰 というものはタブ され、一人としてそのことについて すのは されていませんでした。目に えないものを信じることなど出来ようか、神を信じるのは狂人だけだ、という 潮 だったのです。宇宙 行士は宇宙に びましたが、空の上に白い服を着て い髭を蓄えた神 が座っているのを つけることは出来なかったため、神などは存在しないということになったのでしょう。自分自身、そうした社会に生まれ育った父は、私の疑 に全然答えることが出来なかったのです。彼はこう言いました。「ええと、君は土の中で眠りに つくのだよ…。」

その日の父の答えよりも奇妙な、あるいは恐ろしいことを私は聞いたことはありませんでした。私は3歳でしたが、本当のことを知りたいと思うようになりました。しかし、私の前には道徳の道徳が待っていました。私はその名前を知らなかったものの、神が存在するということが常に知っていたというか、感じ取っていました。私はただ、本能的にその存在と、神が私のことを守ってくれていることを知っていたのです。私が良い子であるのは私のためではなく、神のためだったのです。なぜなら私がどこにいても私のことを守ってくれたのは、神ではなく神だったからです。

私が学校へ通い出すと、父は私の成長に耐えることが出来なくなり、私を母と祖母の元へと送りました。母は第一エストニア共和国の時代に生まれたため、当分の人々と同じようにキリスト教の洗礼を受けていました。彼女が私に神を神と呼ぶよう教え、またキリスト教の祈りである「天に召します我らの父よ」を教えました。また彼女は私に、聖歌を起すから、公衆の場でそれを唱えないよう注意していました。私は心の中で、大きくなったらもっとそのことについて学ぶことを心願したのです。

私はそれを覚えました。11歳のとき、私たちはソ連から独立したため、日曜学校（子供のためのキリスト教を学ぶ学校で、牧師が教会にいる、通常牧師の妻たちによって教えられているもの）に通うことが出来るようになりました。しかし、私はそこから追い出されてしまいました。彼らは、私が寝るべきでないことを多くしすぎ、信仰心が欠如していると言いました。私は彼らを理解出来ませんでした。なぜ神はマリアと結婚などしていないにも関わらず、キリストが神の子とされているのか、またなぜアダムは神の双方がいなかったにも関わらず、神の子ではないのかと疑問を抱くことが出来ることとは思えませんでした。しかし、こうした疑問は、その教義にとっては非常に厄介なものだったのです。

15歳のとき、私は独学でキリスト教についてもっと学び始めました。私はもし、何々や何々を信じないで良いのなら、自分のことをキリスト教徒だと偽っていましたが、結局その宗教の多くの事柄を学べないのであれば、キリスト教徒であることは出来ないだろうと悟ったのです。私には、神の何かを探す必要がありました。

数の宗教について学んだ、私は最終的にイスラームを見つけ出しました。私は去にキリスト教についてとても失望していたため、イスラームのことを学び始めるには多くのことを必要としました。しかし、そうすることはあったのです。

なぜムスリムになったのかと人々が尋ねるとき、私は通常、私はムスリムになったのではなく、それまでただ付かなかっただけで、常にムスリムであったのだと答えます。イスラームのことを最初に知ってから、これが本当の私であるということに付くまで、3年を要しました。そのことを本当に信じているのかと問われるなら、全くの疑念なく「はい!」と答えることができます。それこそが私であり、私が常にそうあったものなのです。21にしてようやく、私はイスラームに改宗しました。神にえあれ!

私は2001年のラマダン直に改宗しました。ラマダンは美しいであり、断食戒の月で、物質的な享からざかり、肉体よりも精神をさせ、自分よりもまれない人々のことに想いをせるです。これこそは、私がムスリムになる前から感じていたことだったのです。私は、人にとって最も必要なものである、心と身体の「」から断食していたのです。私は自分自身の向上を常に心がけ、より良い内的な安がつかれるよう常に祈り、人生の状についていつも分析していました。

私は未だ、なぜラマダンの前や最中ではなく、ラマダンに改宗したのかについて合理的に明することが出来ません。私はラマダンの断食を完遂してから改宗しました。おそらく、私には自らを化する必要があったのでしょう。完璧さをめる前に、最後のステップをとる必要があったのだと思います。

食にまれないのはもちろんそうですが、知やな真にまれないことは、より大きな困です。それゆえ、私たちが断食するときは食をし、食べ物を味わうことが出来るの事だけを考えるのではなく、同時にムスリムとしての私たちに与えられている祝福と、食だけでなく完全性真に近づくことから困している他のしい人々についても考えなければならぬのです。私たちがムスリムとして、真にまれています。私たちが自らの向上のため、一年に一ヶ月の断食をしますが、この世界の大半の人々は、彼らの人生の中の大部分を、真探求のための「断食」をしなくてはならないのですから。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/1195>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。